

藤原清輔伝に関する二、三の問題と

和歌一字抄と

井 上 宗 雄

一 清輔の享年に関する問題

歌学者としてその名をうたわれた藤原清輔は、治承元年六月に歿したが、享年は七十四であるといわれている。清輔は公卿には列しなかったから、公卿補任に官途や年齢は記されず、また清輔の死を報じた玉葉や愚昧記にも享年は記載されていない。尊卑分脈にも享年はみえない。

享年七十四という説は何に依ったものであろうか、というところ、思うにそれは「暮春白河尚歯会和歌并序」に、二カ所にわたって清輔の年齢が六十九才であると記されているのに基づいたものである。この尚歯会の記は承安二年三月に行なわれ、清輔の草したものであるから、信憑するに足りるものである。この尚歯会記は群書類従^{三五}所収、写本は頗る多く、書陵部(三本)・内閣文庫・大東急記念文庫・神習文庫・旧南葵文庫・金刀比羅宮等々の著名な文庫には大概蔵せられ、その他「八洲文藻」等の叢書類にも所収、また古今著聞集にもこれを引いたものと思われる記事がある。勿論私は上掲の写本のすべてを見たわけではないが、管見に

入ったものはみな「六十九」才と記されている。

所が、この享年に異説がある。治承元年六月清輔の死を記した
顯広王記に

十七日乙酉、正四位下藤原清輔朝臣卒去年七十(歌)醉死云々、当
世奇仙也

とある(イは内閣本)。即ち享年七十で、従って通説と四才のひらきが出てくる。顯広王は清輔とも一応の交際はあり、前述の尚歯会にも出席した人であるから、この記述は一まず注意せねばなるまい。顯広王記は『伯家記録考』に収められ、数本によって校合せられている由なので、「年七十」の記載は間違いないものと見られるが、なお内閣文庫本の写本に当たってみたが同じであった。そして管見によると、この顯広王記の説に従っているのは辻善之助編の『日本文化史年表』のみである。

清輔の死が六月二十日である事は玉葉と愚昧記によって間違いないと思われるが、顯広王記には六月十七日の条にある事、顯広王が清輔とは一通りの交際しなかった事などによって顯広王記よりもやはり尚歯会記の記載を信用すべき事を結論としようと

思うが、なお一つの疑念が残るのでそれを簡単に述べておこう。

清輔は顯輔の次子であると推定される。長子は顯方また顯時らしい。即ち、長承三年顯輔家歌合には顯方時が出席して清輔の名がみえぬ事、顯昭の詞花集注抄に「子息には顯方・清輔……」と顯方の名を先に掲げている事、尊卑分脈も顯方時を先に掲げている事によるのである。

所で父顯輔の享年にまた兩説がある。即ち久寿二年歿六十六才（公卿）、同年歿六十七才兵範である。これにもわかに決し難い問題である（拙稿「藤原顯輔伝の考察」國語と国文学昭）。以上、顯輔・清輔の享年の二説を夫々くみ合せると次の如くなる。

	顯輔の享年	清輔の享年	清輔出生年の顯輔年齢	顯方出生年の顯輔年齢
A	66	74	15	14 以前
B	66	70	19	18 以前
C	67	74	16	15 以前
D	67	70	20	19 以前

右によると、通説を組合せたAが最も不自然で、異説を組合せたDが最も自然である。加之、袋草紙に

予金葉詞花両度之撰逢千載一遇、空過之、遺恨第一也、初幼少、後ハ撰集者之子息歌無入之例云々

とある。金葉集成立の年時には種々の問題があるが、一応大治元年とすると、清輔の年齢は、通説では二十三才、顯広王記に従う

と十九才で、共に「幼少」の概念よりは遠いが、しかし後者に妥当性があろう。

ともあれ、十四才でも十五才でも男子の生殖能力はあるのだしまして早婚の古代にあっては十四才で父になる例も不可思議の事ではないし、通説||治承元年七十四才歿にひとまず従っておこうと思うのであるが、なお清輔の享年に関する新資料の発見を俟ちたい。

二 清輔の周辺

清輔が生れたといわれる長治元年は、父顯輔は正五位下越後守祖父顯季オオノは從三位修理大夫、伯父長実・家保も受領を歴任し、一族は、強大な権力を持った白河院の近臣として時めいていた。顯方・清輔の母は分脈によると能登守能遠女。能遠は関白師実の家司であつた高階能遠で、師通記にその名がしばしばみえる。應徳二年能登守、永久二、三年頃長門守であつた（中右記）。顯季は保安四年に歿したが、清輔は時に廿才通説、袋草紙に顯季からの歌話が散見するが、或は祖父から歌話を聞く事があつたのかもしれない。

顯輔は父の歿後、白河院の勅勘を受けて沈淪し、院他界の後には関白忠通に接近してその女聖子。崇徳院后。皇嘉門院に仕えて中宮亮となり、二兄の如く参議納言に昇らず、非参議の三位として生涯を終り、歌人たるの名声によって中流貴族としての地位を保った人らしい。

尊卑分脈所掲の顯輔の子女は十二名。その記載順に記すと、顯賢顯方が正しきか・清輔（共に母は能遠女）・顯成（実は甥。猶子実父は相国実）

行、重家（母は家女房）、顯昭（猶子実父母不明）、頼輔（母は常陸介盛輔女）、季経（公卿補任によると重家同母兄弟、親輔、長寛、女子三名、一女は関白基実実母良平の女は兼実良平母というが、良平の父及び公卿補任によると頼輔女。）以上のうち顯賢・清輔・顯成・重家・頼輔・季経が官途に就いている。しかし散三位の顯輔の力を以てしてはすべての子供に自分の地位を嗣がせるわけには行かない。種々の条件から、官途を配慮する子供は限られてくる。まず清輔の兄弟について一瞥を行なってみよう。

顯方は初名は顯時で、元永元年正月には正六位上で、中宮少進の少進となった。次いで三月十五日「今夕被補藏人中宮少進顯時」（中記）とあるのは顯時であろう。十六才位か。その後官人としては大した活躍を示していないが、歌人としては一応注意すべき存在で、長承三年九月顯輔家歌合に出席、「顯時」とのみみえ、散位であつたらしい。久安五年家成家の歌合には散位であつたが藏人大夫と注せられ、五位にはなつていた。その頃の山路歌合にも出席（抄本）、詞花撰集にも助力した（詞花集抄）。後葉集・続詞花集及び千載集等に歌がみえるが、みな顯方とある。晩年は顯方と名乗つたらしい（同時に兼室顯能男の顯方がおり、記録にし。ばしば名をみせるのは兼室顯方の方である）。官人としては不遇であつたが、歌人として一応の名があつた。

猶子顯成は順調に受領のコースを進んだが（備後・越中守等。忠通室宗子職事等）、歌人ではなかつたらしい。

重家は家集（上野凶吉郎・尊経閣・慶大圖書館蔵）があり、独立して研究すべき重要な人物である。長承元年七才で叙爵して以来多くの受領を歴任し、嘉応二年三位となつて公卿に列した。歌人としても久安五年

家成家歌合に出席したのを始めとして顕著な活躍を示した。才子であつた（五葉）。

頼輔は中務権少輔・刑部大輔・修理権大夫に任じ、四位に至つた官人で、その女は兼実の妾となつて元暦元年（四月十九日か。）良平を産んだ。玉葉参照。同時代の同名の忠教男は有名な歌人であるが、頼輔男の頼輔の詠は管見に入らない。

季経は重家の同母弟（公卿補任）、のち三位に至つて公卿に列した。家集の残る歌人で、俊成や定家のかたき役としても歌壇史上の重要な人物で、独立して研究せられるべきであろう。

顯昭については久曾神昇氏の著もあり、あらためて述べる必要もあるまい。親輔の伝は不明。長寛は仁和寺阿闍梨、千載以下の歌人である。

顯輔の六条家には美人が多かつたという推定がある（谷山茂氏「藤原俊成の若き日を導いた人々」）が、確かにそう思われるふしが多い。そうい血筋を伝えたからか、顯輔の一女は忠通家に祇候している内に、忠通男基実に愛せられて忠良を生んだ。それは長寛二年の事で、清輔と重家の喜びの歌が清輔集にみえる。時に清輔は六十路、重家卅七才、季経卅四才で、この女性は卅才前であろう。顯輔晩年の子か。

官途に就いた諸子の内、顯輔が最も昇進を期待し、またそれに心を配つたのは、後に三位に至つた重家・季経の二人である。その理由は明らかでないが、顯輔が彼らの母（家女）を最も愛していたからであろうか。

顯輔が大治以後の後半生において庇護を受けた権門は忠通家で

ある。それは一に、忠通室子^{（宗）}が顯輔の姪^{（顯輔の長姉が宗）}であるとい
う関係によつたものであらう。宗子所生の女が崇徳后聖子^{（皇嘉）}
顯輔は永らく中宮亮・皇太后宮亮を勤めた。また顯成・頼輔は宗

子侍所の職事であり^{（台記）}、清輔もそこに参候していたらしい
（^{（後章）}）。従つて顯輔の諸子の多くは、宗子と聖子の御用を勤めたり
して叙位されている。即ち、重家の從四位上下、季経の從五位上・

正四位下、経家^{（男重家）}の叙爵及び正四位下^{（補）}、頼輔の正五位下
（^{（久安五年三）}）、清輔の從五位上^{（紙）}等々は何れもその関係による
もので、一々掲げては煩しい限りである。顯輔の一家と忠通家と

の關係は留意すべきものがある。
彼らの多くは公事に仕出すると共に、摂関家に祇候し、特に受
領を歴任したものは、その豊富な經濟力を以て権門に奉仕し、平
安末期から鎌倉初期にかけて、諸大夫階層の一環を形成していた
のである。

三 久安に至る清輔

清輔は初の隆長といったという。それは久安五年家成家の歌合
にみえている。時に散位であつた。同時代に隆長という人がいる
が、これは例の悪左府頼長の第三子である。翌六年に詠進された
久安百首には清輔とあり、或は頼長男の名を避けて改名したのか
もしれない。とにかく頼長男隆長を別にすると記録には全く見え
ない名で、従つて清輔の事蹟は、記録によつて明らかにはされな
い。但し隆長という名も一時的なもので、もともと清輔という名
であつたら、大治四年四月十九日の齋院御禊や同廿五日の祭使還

立の藏人所前駈を勤めた清輔という名が中右記にみえる。通説に
従えば廿六才であるが、果して同一の清輔であらうか。

次に、清輔は三河国名所歌合というものに出席している。これ
は後に常磐丹後守と称せられた為忠が三河守在任中^{（天治二）}に催
したものらしい^{（天末抄廿六）}。清輔二十代の後半である。

「永らへばまたこの頃やしのばれむ……」という有名な歌は、
家集^{（清輔朝）}に「いにしへおもひいでられるころ三条大納言（内大
臣）いまだ中将にておはしける時つかはしける」と詞書がある。

この三条内大臣について香川景樹は「百首異見」で詳しく考証し、
当時三条と称した実行・公教・実房の内、実行は中将とならず、
公教は清輔とさして親交なく、恐らく実房であらう、従つて内大
臣でなく大納言実房が中将の時のもので、恐らく保元・平治の乱
れを敷いた歌であらう、と推測し、実房に贈ったにしては実房が
少し若すぎるかもしれないが、実房の尋常の器量ならざる点からこ
ういう事もありえた事であらうと述べている。

石田吉貞氏は一旦この説に従い^{（百人）}、最近説を改められた
らしく、公教とされている^{（新百人和歌）}。その改説の根拠は述べて
おられないが、私も公教説に左袒したい。即ち管見に入つた清輔
集の写本にはみな「三条内大臣」とあり、これが公教の通称たる
事は間違いない^{（今鏡）}、しかも公教は景樹の推測とは違つて清輔と
は従兄弟同士であり、一方、景樹も述べている如く実房の中将時
代は十二―二十才の間で若すぎる事を考え合せると、公教とすべ
きである。

公教の中將は大治五―保延二年の間で、二十代から三十代にか

けてである。清輔もほぼ同年輩である。老成した歌境であるが、後に述べる如く、父と不和で、沈みがちであった清輔なら三十才位で充分詠みうる境地ではなからうか。

永治二康治年四月、清輔は故通宗通俊兄、姻戚筆本古今集を、書入等をもそのまま書き写したが、上下の考物は清輔が書入れた（前田家）。歌学の造詣はかなり深まっていたと思われる。（本奥書）

天養元年は顯輔が詞花集撰進の命を崇徳院から受けた年であるが、袋草紙には「予干時不快、而令奉此集之後有恩免、是為扶持歟……」とあり、父の勘気が一応とけて撰集の業に助力する事となったが、それは詞花集抄（注）によると、顯方や一族の忠兼・隆縁らと共に、入集歌類似の古歌などを検討する事であったらしい。袋草紙によると撰集方針について意見の相違があったりして、父子の仲は釈然としたものではなかったらしい。

家集に「宇治左大臣花見給てかへりて後人々に歌よませたまひけるに」と詞書ある歌があるが、これは或は久安元年三月十七日の事（台記に、顯輔らが頼長を誘つて法勝寺に花見して詠歌した記事がある）かもしれない。

崇徳院は康治二年に百首を詠進すべく十三名の歌人に命じたがその作者中、同年十二月に行宗が、久安二年八月に寛雅が、同四年六月に公行が歿した為、院は代りに清輔・実清・季通を加えた。この三人が一人ずつ加えられたか、三人同時に加えられたかは不明であるが、久安四年頃までには清輔も作者となったのである（谷山茂氏「久安百首部類本と千載集」平泉朝文学研究三五）。この百首は久安六年には詠進されたという。康治二年当初に指名された十三名に清輔が加えられなかったのは、その頃父と不和で、父の積極的な

推挙のなかった事、卑位であった事、晴の会には出た事もなく歌壇的に著名ではなかった事などに依るのであろう。

この百首に兄の顯方を超えて作者となったのは、清輔の歌人・歌学者としての力量が久安四年頃に顯著になってきた事を物語る。この百首中の「梅花おなじ根よりは生ながらいかなる枝の咲おくるらむ」を宗子は憐れんで、朝観行幸御給として従五位上に叙したという（袋草）。家集の「うらうへに身にぞしみぬる梅の花句ひは袖に色はここに」も同じ時の詠であらう（詞に「法性寺殿の」あるが、「北政所」宗。四十代の半ばをすぎるまで従五位下であったらしい。その不遇の程が察せられるし、彼の狹量といわれる性格も、この間に磨きをかけられた（？）ものかもしれない。同時に和歌の実力もこの間に貯えられたものであろう。）

久安五年六月家成家歌合、七月山路歌合に出席、後者には判者になったともいう（抄本）。かくして清輔の事蹟は久安四、五年頃からようやく明らかになってくるのである。

清輔が、兄顯方と共に、重家らの兄弟に比べて官途において特に不遇であった事は、現在の段階では、父の愛護を受ける事が極めて薄かったからである、としか私には考えられない。極端に年齢の近い父子という事は、愛情・性格の問題などに微妙な違和感があるもので、それによって貶しめられていたものかもしれない。

因みに参議惟方記・中納言顯時卿記共に歴代残、關日記所収久安五年八月の条に、皇后宮子少属に清輔なる名がみえるが、多分別人であらう。五位の任ずる官ではない。

(イ) 30 宮ぎの が 36 と 37 との間に入る

(ロ) 119 心あら が 115 (内閣本にはないから実際は 114) と 116 との間に入る

(ハ) 134 はととぎ と 135 たがさと とがいかわる

(ニ) 212 道しら が 209 (内閣本にはないから実際は 205) と 210 との間に入る

(ホ) 494 夕露 が 500 と 501 (内閣本には 501 502 がないから実際は 503) との間に入る

(C) 標目・歌題の異同

(イ) 標目は内閣本目次では東より客に至る百であるが、丹鶴本で数えたと百二となる。これは第卅四番の「温」と、次の「照」とが内閣本では一標目となり、第七十一番目の「未落」と、次の「鮮」とが一標目となっているからである。

(ロ) 歌題の異同は頗る多い。主要なものののみを掲げておく。

37 竹中鶯声 42 旅中春暮 121 遠思秋萩 145 秋夜長 188 盧橋晚薰

294 「同」とのみ 335 虫声添恋 426 花影写水 433 春花浮水 458 落

花薰風 538 (題なし脱落)

(D) 作者名の異同

(イ) すべて「藤原」の「原」は略されている。

(ロ) すべて大臣の下の実名は記されていない。

(ハ) その他主要なる異動のみを記す。

9 文満卿 21 安金 師 71 藤行家朝臣 72 (後なし) 92 俊長

少将 95 慶範法師 106 源縁 113 頼氏式部大夫 134 輔尹朝臣 137 名

なし 164 雅卿 199 (名なし) 211 永胤 225 源 268 匡房 275 素紀

伊入道 279 源貞高朝臣 301 橋為通監物 378 賀茂助成 433 国基 439

俊頼 443 俊頼 444 匡房 468 行家 507 隆俊 511 惠京 慶家 536 顯

季 538 (名なし但し題もな脱落か) 543 行窓 562 顯季 568 通宗 569 大中

臣輔照 592 頼家 594 (名なし)

(な) お 26 50 は「関白前太政大臣」、他は「関白」とのみ。共に忠通をさす

(E) 集名・歌会名等の異同

(イ) 丹鶴本には歌の右肩に入集した集の名が記されているが、内閣本には全くなく、題の下に記されている。

(ロ) 主な異同を掲げる。

18 (金なし) 22 (イの字なし) 30 良山集 43 (後拾なし)

83 後(後拾事) 110 後 114 上 116 後 133 上 137 の左に「已上御堂歌合」

158 玄々集(との) 164 金 189 (金なし) 210 (拾なし) 263 金

271 金 306 「堀川院中宮歌合」は 305 の左に 320 金なし 346 後 348

の左に「已上三首同座」 358 (金なし) 372 (金なし) 377 後 389 後

394 (金なし) 404 (金なし) 448 の左に「已上俊綱会」 465 金 468 良

473 後 485 後 494 良 548 「已上同座イ」のイなし 552 上 553 後

574 後 586 後

(F) その他

語句の異同も当然掲げるべきであろうが、紙幅もないので、二三例示するに止める。

(イ) 丹鶴本にはその歌の入集した歌集によって校合されている処があるが、内閣本にはない。

(ロ) 語句の欠脱箇所は次の如くである。

65 初句 354 下句 366 五句「くたりけり」 454 歌全体(題あり) 528

下句 576 二句以下

(イ) 30 三句「みたるらし」 54 初句「川ふねの」 62 四句「岸へ」

85 三句「月みれば」 148 初句「よそにては」(以下略)

以上について注意される事を述べる。

1 内閣本について

(イ) 歌数の多い順に掲げると、俊頼 67内一首・顕季 38・匡房 20・関白

通忠 18・経信 18・三条大納言公実 10、以下、良通・花園左大臣仁有・

白河院・嘉言・実綱・顕仲・顕輔・為義・師賢・仲正・太政大

臣実長・新院・贈左大臣実長・元輔・俊綱等々である。

(ロ) 右によると、後撰以後の歌人の詠を採り、特に後拾遺以後、当代の歌人を重視している。

(ハ) すべてが清輔と同時代かそれ以前の歌人である。

(ニ) 詞花集入集を注した歌は一首(97)。また金葉集からは四十七

首を採ったと推定され、すべて再奏本から採ったらしい。そのほか良通打聞以下の集から採った事は注意される。

2 内閣本にみえず、丹鶴本にのみみえる歌について

一四五首の内、最も歌数の多いのは定家 28、次いで俊頼 24、以下、行宗・西行・匡房・実行・新院等々である。清輔とほぼ同時代、それ以後の歌人たる頼政・宮内卿・後京極・仲正女・光俊らの詠はすべてこの一四五首に含まれる。

内閣本は原撰本一字抄であろうか。

丹鶴本にも桂宮本にも、鎌倉期歌人の歌題の下に「裏」「裏云」「裏書」等の注記があり、これが元来は裏書に追補されたものである。たゞ内閣本に無く、丹鶴本系にのみみえる一四五首の内にも俊頼はじめ清輔以前の歌人の詠が多くみえるのはどういふ訳であろうか。

それらの中にも後人の追補歌があるらしい。例えば実行・雅定の歌が若干みえるが、「実行卿」「雅定」とある。この人々は一方に「内大臣」「右大臣」とあり、これが正しい記し方である。この表記の不統一は追補を暗示していよう。即ち清輔時代の人の詠で後に追補されたものもあると思われる。しかし 163「殿下」基実の歌や、また「新院御製」等々は、或は清輔が晩年に追補したものかもしれない。現在の段階では速断を避けたい。

清輔が晩年に増補したのかもしれないものは別として、後人が裏に追補したのは鎌倉中期であろうといわれている(圖書寮典)。一度に追補されたか否かは不明であるし、また追補歌に俊成や家隆の詠がない事情は明らかでない。

ともあれ、内閣本は多分原撰本であろう。とすれば何時頃撰ばれたものであろうか。関白(前太政大臣)が忠通で、太政大臣が実行で、右大臣が雅定で、内大臣が実能である所から、久安六年十二月以後、保元元年五月以前の成立と思われる。更に雅定が久寿元年五月に出家している事を考慮に入れるとまず仁平年中に成ったとみてよいであらう(歌学大系の奥書抄解題も仁平四年までとされているが、同じ奥書によるのであろう)。なお集名注記(歌題の下に記されているもの)が清輔のものか否かは後考をまちたい。

入集傾向は、俊頼に好意を見せている事、顕季をそれに次ぐ歌

人としている事、逆に基俊^二に好意を示さぬ事など興味がある。

俊成^八の歌が入っていないのは、清輔が對抗意識を持っていたからではなく、俊成をよく知らなかった為で、即ち俊成が仁平頃には六条家の交友圏と全く別のところにいたからであろう。

丹鶴本一字抄の下巻にも、定家や小侍従らの詠が混入し、追補本である。原撰本と目すべきものは管見に入らない。「三十六番相撲立詩歌」と内題する架蔵本が一字抄の下巻にあたるが、定家の歌^八のみが混入する（^取丹鶴本が五七六首を収めるのに対して四五五首所はやや近いようであるが、即ち中間本）。^{（清輔以後の歌人では定家がみえるのみで、原撰本にはやや近い、やはり純粋な本ではない。）}

五 清輔に關して注意すべきこと二、三

(1) 三位大進 頼政集・重家集・古今集^{平治元年集書}に、清輔の事を三位大進と称している。古今集の奥書は後人の追記であろう。重家集には正四位下に叙せられた記事の後、加階の事はみえぬのにしばしば三位大進と記しているのは不審である。清輔が三位にならなかったのは玉葉・顯広王記によっても明らかで、或はこれは「散位大進」の誤りか。公卿補任には勿論みえない（^{なお清輔が大進であつたのは散位になつて以後。}）

(2) 和歌現在書目録 この書が清輔・顯昭・経平の撰なる事の明らかにされたのは、太田品二郎氏の「古蹟歌書目録」の発見によつてである（^{日本学士院紀}）。この書を仁安元年の成立とする説^{佐佐木}があるが、天理本・彰考館本・上野図書館本・続類從本の序は何

れも「仁安之年夷則之月」或は「人のやすき年神まさぬ月」の成立とあつて、元年とは限定できぬように思う。

(3) 清輔集 清輔の家集は、類從本・国歌大系本・続国歌大観本・板本（二種。^{元禄十二刊三冊本・文化十年刊二冊本}）・書陵部本・書陵部蔵片玉集所収本・内閣文庫本・静嘉堂蔵松井A本・同松井B本・彰考館本・尊經閣本・神宮A本・神宮B本・松平文庫本・高松宮本・小沢蘆庵本等がある。管見に入つたのは尊經閣本まで、神宮二本は松野陽一氏に調査をお願いしたがそれらの結果は何れも語句に小異があり、歌に多少の出入があるが同系統である（^{松野氏も一五本を蔵せりとす。}）。所が、今井源衛氏の御教示によると松平文庫本はやや注意すべき由である。この松平本の整理が完了し、閲覧が可能になるまで清輔集の一つの論としてまとめるのは保留すべきであると考える。ただ流布本^{神宮本}について言えば、従来いわれてきた（^{日本文}）^{（群書解）}清輔晩年の自撰集である、という事は一応認められよう。但し私見では承安末から安元にかけて、手が加えられつつあり、晩年の詠などは、歌の撰択も、詞書の推敲なども完了しないまま死を迎えるに至つたのではないかと推測している。

以上、久安仁平以前における清輔の略伝を中心に述べ、また和歌一字抄についての考察を行なつた。一字抄その他について谷山茂・橋本不美男・樋口芳麻呂・松野陽一の諸氏に種々の御教示をえた事を謝すると共に、なお一字抄・清輔集の伝本について大方のお教えをいただきたい。また大東急本奥義抄及び清輔の後半生については近く機会をえて叙述するつもりである。